

英米における日本語教育の一端

秋 永 一 枝

Japanese Language Teaching in the U.S. and England

Kazuo Akinaga

This is a report on some aspects of teaching Japanese at the following universities in the academic year of 1962. Among the reported are: hours of teaching, period, materials, examinations, the number of students, etc.

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| (1) Columbia University | (4) The University of Chicago |
| (2) Harvard University | (5) The University of London |
| (3) The University of Michigan | (6) Cambridge University |

昭和 37 年 9 月より 2 学期間、私は早稲田大学から派遣されて St. Louis の Washington University におもむく機会を得た。その短いアメリカ滞在中に、そしてまた帰路のヨーロッパ旅行の途中に、私はできるだけ、日本語教育が行なわれている大学をたずねようと思った。経済的・時間的都合から、アメリカ西海岸は割愛せざるを得なかった。また、休暇中で授業も参観できず先生方にもお目にかかれないうこともあった。

しかし、次に報告する大学では、授業を参観させていただいたり、担当の先生方からくわしいお話を伺うことができた。あるいは、私の記憶ちがいもあるかもしれない。また、失礼にあたる段もありはしないかと恐れる。誤解・曲解などご指摘いただければ幸いである。

§ 1

英米の大学の日本語教育というのは、大きく二つに分類できると思う。一つは、一般教育の外国語としての日本語教育であり、一つは日本学もし

くは東洋学を専攻する者のためのそれである。

上記のワシントン大学では、初級は週3時間(2学期より上級週6時間の学生が1名増)であった。アーラム大学(Earlham College, Richmond, Ind.), アンティオク大学(Antioch College, Yellow Springs, O.)の日本語教育は、早大に1~2学期間学生を送るという特殊ケースで始められた講座で、ともに週6時間であった。これらの大学は、将来は日本学を専攻する学生が出てくるかもしれないが、日本学科とか東洋学科とかいう専門学科を特に設けず、一般教育の語学として行なってゆくものである。アメリカでは、日本語を外国語教育の一環として扱う傾向がおいおい増加してゆくようである。現に、二、三のハイスクールの Summer course で、中国語や日本語の Intensive course が新設されたりしている。

その他にも、夜学の会話学校などには、日本語を教えているところが時にある。ワシントン大学の夜学の成人学級では、Yoshi Carpenter 夫人が以前から日本語を教えておられた。

しかし、以上のようなコースは、おおむね時間数も少なく、教師も1名で、それぞれの教師により教育方針も定まるというわけである。それゆえ、その大学独自の教育方針として報告すべきものではないように思う。そこでここでは、日本学科もしくは東洋学科という形式で日本語教育が行なわれている大学にのみ焦点をあててみた。

次に、これから報告してゆく大学の名をあげておく。

Columbia University
Harvard University
The University of Michigan
The University of Chicago
The University of London
Cambridge University

以上の大学の日本学科や東洋学科では、学生は社会学・経済学・人類学・歴史学・文学・語学等、それぞれの分野を専攻もしくはこれから専攻しようとしている。そして、日本語の授業と平行して、英語で日本の歴史・社

会・思想・文学といった講義をきく。それら専門講義の担当者は、ふつう英語を母国語とされる専門家である。日本語教育のほうは、それらの方々のほかに、日本語を母国語とされる方々が担当される。

たとえば、ミシガン大学では、Joseph Yamagiwa 氏が「日本文学史」「日本思想史」「現代日本語」などを英語で講じておられる。また、この大学では日本から専門家を招いて専門講義を行なっている。たとえば、名古屋大学の野村正良氏(言語学者)が「日本語史」「方言」などを、東京都立大学の佐伯彰一氏(文芸評論家)が「日本文学セミナー」を、ともに日本語で講義しておられた。前任者としては、東京大学の築島裕氏(国語学者)、東京教育大学の小松英雄氏(国語学者)がおられる。

ここでは、初級から上級までの日本語教育は、Hide Shohara 女史がふたりの日本人留学生を助手として、まさに孤軍奮闘しておられる。

コロンビア大学でも、白戸一郎氏や羽毛田義人氏らが日本語教育に専心され、Donald Keene 氏や Ivan Morris 氏らは日本文学や日本演劇等の専門講義をとというふうに、それぞれ分担しておられる。

そこでここでは、日本語教育という点に更にしぼって報告したいと思う。すなわち、「日本文学」や「日本歴史」といった専門科目は原則としてとりあげないものとし、日本語教育のみを対象として扱うことにする。なお、すべて昭和37年9月より38年7月までの現状であることをお断わりしておく。

§2

(1) Columbia University

ここはつい最近まで書きことば重点主義の教育だったようである。しかし、一昨年あたりより、L.L. も整備されてきた。また授業中も「朝の訪問(井伏鱒二宅を永井竜男が訪問のもの)」や、「ラジオアンテナ(杉葉子のもの)」のようなラジオ放送のテープを使用している。

ここには Non-intensive course と Intensive course と Conversation

course とがある。

Non-intensive course

1 年度...毎日1時間, 週5時間

教科書としては B. Bloch and E.H. Jordan: *Spoken Japanese I* と長沼直兄: 「改訂標準日本語読本」巻一前半まで
学生数 11¹⁾

2 年度...毎日1時間, 週5時間

「長沼読本」巻一後半および巻二終了
学生数 15

3 年度...月・水・金の週3回で, 週5時間

「長沼読本」巻三および巻四終了
学生数 8

Intensive course...こちらは, 時間が前者の倍. したがって進行も倍である.

1 年度...毎日2時間, 週10時間

第1学期で, Non-intensive course 第1年度分の *Spoken Japanese I* と「長沼読本」巻一前半とを終了
第2学期で, Non-intensive course 第2年度分の「長沼読本」巻一後半と巻二を終了
学生数 5

2 年度...毎日2時間, 週10時間

現在これは Intensive course の第1年度につづくものではない.

Non-intensive course の第2年度から始まって, 1学期に Non-intensive course の2年度を終わり, 2学期に Non-intensive course の3年度を終了する.

1) 以下, 学生数はおおよその人数である.

つまり、1 学期に「長沼読本」巻一の後半と巻二を終了、2 学期に巻三と巻四を終了する。

学生数 2

なお、Non-intensive course, Intensive course とともに、5 時間につき別に 1 時間の L.L. が必修である。また、教科書は以上のほかにその時々に応じて短文のプリントを使用する。

週 10 時間 28 週の Intensive course 終了の学生は、使用漢字 650 字のうち、90% が読め 70~85% が書け、単語 2500 が理解できるというから、相当の成果があがっているとみてよいだろう。また具体的な試験方針は不明だが、1963 年 5 月の試験では 柳宗悦の「生活と美」や、森有礼の話などから出題されていた。

Non-intensive course と Intensive course の進行状態を示せば次のようになる。

	Non-intensive course	Intensive course	2 年度より Intensive になる course
<i>Spoken Japanese I</i> 「長沼読本」巻一前半	1 年度	1 年度 1 学期	
「長沼読本」巻一後半 「長沼読本」巻二全	2 年度	1 年度 2 学期	2 年度 1 学期
「長沼読本」巻三全 「長沼読本」巻四全	3 年度		2 年度 2 学期

Conversation course

1 年度...1 日 1 時間、週 5 時間

教材は不明

L.L. は週 2 時間必修

(2) Harvard University

この東洋学科としては、中国語・日本語・朝鮮語のうち、2 か国語が必

修となっている。

ここでは Howard Hibbett 氏・板坂元氏らが中心となって、目下教科書作成中である。これは 60 課までの予定で、39 課までは当用漢字・新かなづかいのみとし、40 課からは当用漢字外の字および旧かなづかいを混用する。この大学には別に先年作成済のローマ字によるテキスト全 26 課があり、これとあわせた 86 課を、週 8 時間の Intensive course の 1 年間の教材として予定しているようであった。

この大学では、話しことばにあまり重点がおかれてなく、L.L. は現在使用していない。

時間数・進行・学生数などについては、次表に示す通りである。

No.	時間数	期間	学生数	備考
AAB	8 (Intensive)	第 1 学期	13	主として大学院学生、半数は中国語修了者。 AAB の学生がここへ続く。 ここで終わる学生が多い。 104まで終わった者のクラス。
↓ 102	8 (Intensive)	第 2 学期	?	
↓ 103	3	1 年 間	14	
↓ 104	3	1 年 間	10	
↓ 121			25	
B	4 (Non-intensive)	1 年 間	10	} AAB; 102 が 1 年間で修了するコースを、こちらは 2 年間でこなす。ここを終わった者は 103 へと続く。
↓ 101	4 (Non-intensive)	1 年 間	17	

(3) The University of Michigan

語学教育がここほど有名で、またここほど参観者の多い大学もないだろう。大学についたとたんに事務所でスケジュールを開かれ、地図その他パンフレット一式をわたされ、更にアポイントメントまでとってくれた。次々と訪問者をさばいてゆくあざやかさにまず驚かされた。

この日本語教育は、Non-intensive course と Intensive course と、それらの上の Reading course とにわかれている。

Non-intensive course

1 年度...週 5 時間. そのうち, 英語での説明が 2 時間, ドリルが 3 時間である. ドリルの時は原則として英語は使用しない. (実際は使用せざるをえないようである.)

学生数 15

1 学期...H. Shohara and J. Yamagiwa: *Introduction to Spoken Japanese* を使用.

2 学期...H. Shohara 氏が現在作成中のテキストを使用. この学期から漢字を 1 日に平均 5~7 字ずつ出してゆく. 2 学期に教える漢字は約 250 の予定とか.

2 年度...週 4 時間

この年度では書きことばにも相当の比重をおく. E. Reischauer: *Elementary Japanese for College Students* などを使用する. 学生数不明.

Intensive course

Summer intensive

1 日 4 時間, 週 20 時間で, 8 週間行なう.

ここで Non-intensive course の 1 年度分を終了する.

秋からの 1 学期

1 日 2 時間週 8 時間で, 15 週間行なう. この秋学期間で, Non-intensive course の 2 年度分を終了する. 現在大学院学生のみ.

2 学期

週 6~8 時間で, Non-intensive course の 3 年度分を行なう. 現在大学院学生のみ.

なお Non-intensive course, Intensive course とともに, 週に一度ぐらいは L.L. を使用させるようにしている.

Reading course

週 3~6 時間

その年度では、1 学期に菊池寛の「福沢諭吉」、長沼読本旧版の「乃木大将」などのテキストを使用していた。2 学期は「週刊朝日」連載の永井竜男の短編などを使用。また上級には、「つれづれ草」などの古文や、「論語」「日本外史」などの漢文も教えたりするそうである。

2 年以上在学してこのコースを出ると、「日本語史」「方言」などの講義をうけるようになる。つまりこれより上のクラスは、専門科目の講義に重点がおかれるわけである。

学生は社会学専攻の者が最も多く 20 名くらい。文学専攻者は少ない。3 年 (8 人)、4 年、5 年のまじったコースである。

私が参観した 1 クラスはちょうど試験だった。永井竜男の「青い煙」の一部が出され、「次の日本語の意味を英語で説明して下さい」とあった。

なお、ミシガン大学の日本語教育については、教育大の小松英雄氏が書いておられる。²⁾

(4) The University of Chicago

ミシガン大学がどちらかといえば話しことばに重点をおくのにひきかえ、こちらは「読むこと」が主で、話しことばには力点はおかないそうである。話しことばの方は、他の大学の Summer course へ行かせるとか、大学院になって日本へ留学させるとかで補いをつけるそうだ。L.L. は自由意志にまかせ強制はしていない。

ここでは、まず歴史的かなづかいからはいってゆく。ただし、現在古文は教えていない。

Edwin McClellan 氏のお話によると、学生は週 20 時間の予習を必要とするそうである。

2) 「言語と文芸」36 年 11 月号, 37 年 5 月号

1 年度...日本学が週6時間ある。このうち文学・歴史は英語で講義してもよいそうだ。別に会話中心の時間が週に2,3時間ある。教科書としては E. Reischauer: *Elementary Japanese* や、夏目漱石のものなどを使用する。

学生数 7, 8 人

2 年度...週 6~8 時間

教材としては、芥川竜之介のものや有島武郎の「或る女」(?) などを読む。その他 E. Reischauer: *Selected Japanese Text* も併用。

学生数 2

3 年度...週6時間くらい

夏目漱石の「坊っちゃん」などを読む。このころには、学生が自発的に柳田国男の作品などを読むようになってか。

4 年度...現在学生はいない。

(5) The University of London

ここも、どちらかといえば書きことばに比重をおいている。1 年度より新旧かなづかい、新旧字体ともに教えている。

L.L. はないが、3, 4 人のグループにわかれて教師をかこんでの会話の時間がある。週4回で1回30分ほどである。1年の1学期は学生がうまく話せないので、主として教師が文法を教え、2学期あたりから C. J. Dunn 氏, P.G. O'Neill 氏のテキストの会話を中心に話しあってゆく。学生が少しなれてくると、テーマを出しておき、それを中心に話を進めてゆくようになる。O'Neill 氏はちょうど敬語のプリントを作成中だった。

なお1年間の授業は30週で、うち前期と後期の試験が1週ずつある。日本と違って休講もなく、私が参観したのは第29週の時だった。

ロンドン大学の日本語教育については、現在千葉大学の池田重氏が報告

しておられる。⁸⁾ 時間数は、今一応それに従うことにする。

1 年度...週 11~15 時間

教科書は、C. J. Dunn 氏は C. J. Dunn, 築田銚次: *Japanese* (Teach Yourself Books) を、P. G. O'Neill 氏は、P. G. O'Neill, 築田銚次: 「日本文入門 (*Introduction to Written Japanese*)」を使用。なお、前者はローマ字のみ、後者は当用漢字のうち 680 字を含むもので手紙文などには筆写体も印刷されている。学生数は 7 人で、うち 3, 4 人が日本語を専攻している。

2 年度...週 8~10 時間

Dunn 氏は、「映畫と教育(新かなづかい・旧字体)」、「くぢらがり話(旧かなづかい・旧字体)」などのプリントを使用。また、3 年度との混合クラスでは、英国における日本語教育の草分けである F. J. Daniels 氏が Roy Andrew Miller: 「現代日本文読本 (*A Japanese Reader*)」を使用され、年度末にはその中の「細雪」を講義中だった。

学生数 4

3 年度...週 5~8 時間

学生数 2

4 年度...必修テキストを 3 年度までにすませ、この年度は各自にエッセイをかかせる方針とか。

なお、法政大学の西郷信綱氏は主として会話コースをおもちだったと思う。D.E. Mills 氏の教材等は不明。築田氏はちょうど在日中であつた。

(6) Cambridge University

ここはまず旧かなづかい・旧字体ではじめ、あとで新かなづかい・新字

3) <英国における日本語教育について>「日本語教育のために」創刊準備号

体を教える。早く古典にはいるので、この方針は当分かえないそうである。できるだけアカデミックなものにしたい、古典もどんどん読めるようにしたいという方針なので、相当むずかしい教材が使用されている。

1 年度...週 9~10 時間

学生数は 3 名。なお、1963 年度は 2 名。

1 学期...週 9 時間。毎日 1 時間、週 5 時間で *Elementary Japanese for College Students* を終了する。ほかに 1 日 1 時間、週 3 回の Conversation class と、週 1 時間の Composition class とがある。Conversation class は Teach Yourself Books の *Japanese* を中心に行なっている。

2, 3 学期...週 10 時間

「市民の文化」、菊池寛：「日本の偉人——福沢諭吉——」、岩村忍：「自由へのたたかい——日本人はどれだけの事をしてきたか——」など、「日本小国民文庫」などから抜萃して使用する。それぞれ週 2 回 1 時間ずつである。なおこの大学では原則として特定のテキストは用いず、種々の本より抜萃して写真をとり、教師がそれを説明するという方法をとっている。Conversation class と Composition class は 1 学期に同じ。

2 年度...週 8~11 時間

学生数は 0。なお 1963 年度は 3 名。

1 学期...週 11 時間。そのうちわけは、「雨月物語」3、「寒山拾得」1、「藪の中」1、「近世社会」2, Conversation 3, Composition 1 である。それぞれ 1 回 1 時間ずつ。

2 学期...週 11 時間。そのうちわけは、「古今集」1、「方丈記」3、「藪の中」1、「近世社会」2, Conversation 3, Composition 1 である。

3 学期...週 8 時間。「古今集」1、「方丈記」3, Conversation 3,

Composition 1 である。ここまでで、「古今集」は巻一を、「方丈記」は全巻を読み終わる。

3 年度... 週 6~8 時間

学生数 0.

この年度の予定では、1 学期に「平家物語」「邪宗門」を、2 学期に「平家物語」「邪宗門」「老松」「福翁百話」を、3 学期に「平家物語」「福翁自伝」を行なう。ただし、各学期ともに Conversation class が 3 時間と Composition class が 1 時間ある。

この大学では、第 1 年度は教師全員が現代語を担当するが、2 年度以上になると、E. B. Ceadel 氏が主として古典を、C. E. Blacker 女史が主として近代・現代を、C. D. Sheldon 氏が歴史・社会を中心に担当する。1、2 年度を通じ、Conversation と Composition class は、早大文学部の鳥越文蔵氏が行っていた。

ここで驚いたことは Tripos である。第 1 年度を修了すると、第 2 年度に進む前に第 1 回の Tripos がある。それに合格した者のみが続いて第 2 年度に進むことができる。2 年度が終わると Tripos II というのがある。それに合格しなければ 3 年度には進めない。これは再試験・追試験はともかくも、落第まで認めないのだから、何とも無情な資格試験である。そこで、1962 年度は、2 年、3 年とも学生が 0 ということになる。ここの試験でもう一つ驚いたことがあった。それは印刷された試験用紙が、1961~1962 年で 3 冊というふうに製本されて、図書館の書棚いっぱいにならなかつたことである。本の背には「Cambridge University Examination Papers」とあった。これは教師にとって大変なことである。いいかげんな問題は出せない。学生もまた一応目を通さなくてはならない。しかし、なかなか良心的なことだと思う。早稲田大学でも入学試験問題や期末試験問題を製本してはどうかと思った。

なお、この大学では L.L. はおろかテープレコーダーの設備もない。し

かし学生数が少なく、教師と話し合う機会が実に多い。その年の夏休みを利用して1年度生のひとはミシガン大学の Summer intensive へ、ひとはナホトカ回りで日本へ出かけた。同じくらいの出費だそうだが、日本へきた学生のほうが会話の点ではずっと上達したそうである。

§3

以上述べたように、学生数はアメリカが圧倒的に多い。しかしこれは、大学進学者の絶対数からみても当然のことであろう。

時間数では、シカゴ大学・ロンドン大学・ケンブリッジ大学が、他の大学の Intensive course にほぼ匹敵する。しかし、前者は小説や古文などにかかる比重が大きく、後者とは教授内容が著しく異なるので、時間数だけで云々することはできない。

それぞれの大学の個性の相違は、やはりその大学のというより、その大学のスタッフの考え方の相違から生み出されるようである。

よく、ミシガン大学は話しことば重点派の中心で、シカゴ大学やイギリスの大学はその反対だということを聞いた。たしかに、ミシガン大学にはすばらしい L.L. もある。出入りの時間をカードに記入し、机上の何番というボタンを押すと聞こえるようになっている。しかし、そこで聞かれるテープは、その時使用しているテキストの朗読が二種類はいつているのみであった。

コロンビア大学は、二、三年前より L.L. を使用するようになり、教材のほか放送用のテープなどもとりよせてあった。またここでは学生に貸し出せるようにもなっていた。

その他の大学は、L.L. にほとんど重きをおいていない。そうなると、ミシガン大学とコロンビア大学は話しことば教育に熱心で、その他はそうではないようにも見える。しかし、一概にそうともいえないようだ。それは学生と話し合った時にも感じたことであった。L.L. は勿論あった方がよい。あってほしい。しかし L.L. 教材の内容が問題なのである。L.L. を

最大限活用するのは大変なことだ。それには特別に教材を編集しなければならない。教材の朗読をきかせ、あとをつけさせるだけなら、ふつうのテープレコーダーを使うのとかわりないと思うのだが。といて、日本で L.L. が L.L. としてじゅうぶん活用されているところがあるだろうか。とてもそんな機械はそろわないとか、機械はそろったが建物がないとか、そうした活用以前の問題でストップしているところが多いのではないだろうか。

なお、上記の大学では見られなかったが、アメリカでは時に日本語らしからぬ日本語が、かつて日本語を母国語としたという既成事実の上にあぐらをかいていたりする。誤字が多いとか、敬語の誤用とかいう生易しいものではない。発音・語法・語彙、すべてが狂っているのである。しかし、英語さえ話せれば相手は外国人、教師の日本語がちがってようと分りはしない。おそろしいことである。

さて教材だが、長沼読本や L.C.U. とか国際学友会の教科書を使用して積み重ねてゆく形式と、意味内容に重点をおき、種々の材料から数ページずつプリントしてゆくという形式と、二つあるように思う。後者の方が面白みがあるかもしれない。しかし基礎的なパターンさえも落としてしまう可能性大である。じゅうぶんに積み重ねられ、しかも内容的にも面白いという教材が必要である。そうした両面ともに満足のゆくような教材が早く出てきてほしいと思う。

アメリカで、長沼氏の「標準日本語読本」が昭和 6~9 年の旧版に至るまで使用されているのには正直びっくりした。しかし、Word Book や Kanji Book などの付録が至れりつくせりなので、教師としては使いやすいものなのだろう。Reischauer 氏の *Elementary Japanese for College Students* は、昭和 19 年出版だから勿論旧かなづかい・旧字体だが、それがいまだに多く使われているのにも驚いた。新かなづかい・新字体の辞書を買った学生は、教科書とちがうと弱りきっていた。

勿論、新旧かなづかいのどちらを優先させるかは、それぞれの大学の教育方針によって異なる。しかし、各大学ともに新かなづかいおよび字訓の

旧かなづかいは一応教えているようだ。字音の旧かなづかいは所によっては教えていない。また当用漢字の新字体はミシガン大学のように略体として扱っているところも多い。

たしかに、在英米日本語教師の大半は、旧かなづかい・旧字体で教育された方々である。そして私どものように、新かなづかい・新字体という戦後の波状攻撃をうけていない方々が多い。そうなるとうどうしても感覚的に私どもとはずれてくるようだ。私なども、昭和 31 年に「同音の漢字による書きかえ」が発表された時には相当抵抗を感じたものだった。たとえば「兎」はすべて「凶」になるのも気になった。しかし、毎日のように新聞で「凶悪犯人が凶器で凶行を働いて」いるのを見ているうちにおかしいとも感じないようになってきた。しかし「腐蝕」「日蝕」などを「腐食」「日食」と書くのは見なれないせいはまだ使えない。結局はなれであろう。英米で日本以上に旧かなづかい・旧字体が優遇されているのもそんなところに根本原因があるのではないだろうか。

ただし、欧米・日本に共通していえることは、日本語教師がそれらをマスターしているとはいえないことである。というより無関心な場合が多いのである。そして、それは日本学を専門としてない方々に特にめだった現象だった。一つの文の中で旧字体と新字体をまぜたりしているのはまだいい。しかし、字画が1本たりなかったり多かったりするの困る。私なども誤字は書く。しかし、教科書や試験問題の時はしじゅう辞書をひいて注意している。決して自分を過信しないつもりである。しかし、そんなことは日本語教育において枝葉末節だと考えている方が案外多いのではないだろうか。英語教師が the を tha と書けば不勉強以前の問題だろう。だが、日本語教師が「昼」を「𠂔」、「混雑」を「込雑」と書き、「こおり(氷)」を「こうり」、「いう(言う)」を「ゆう」と書いても通用しているのである。私などは英語のつづりをまちがえることよりも日本語をまちがえることのほうが教師としてはずかしいと思うのだが…。この春、ある大学で日本語の教科書が出版された。その Writing をみて驚いた。いったい、辞書

や参考書を見なかったのだろうか。ざっと目を通してだけで明らかな誤字が 400 字中 10 字もあった。それが Writing の本なのである。

その他、送りがなにいたっては、どれをみても統一されてないようである。まったく「送りがなのつけ方」くらいやっかいなものはないのだから、これはまあしかたあるまい。

もう一つ文法についてだが、内外をとわず日本語の教師たる者、せめて学校文法くらいは目を通していただきたいと思う。日本語を英語の文法でかたづけられては困るのである。たとえば、いわゆる形容動詞の「きれい」を国文法でも形容詞だと思いこんでいる方がかなり多い。「見ない」「思わない」の「ない」も、国文法でともに形容詞と思いこんでいる方も多い。また、「着れる」「見れる」「出れる」「食べれる」を、何の抵抗もなく教場で教えている方も少なくないのである。

日本文学・語学専攻の者は、以上のような面はまことに神経質である。しかし外国語特に会話はおそまつな者が多い。では、外国人の日本学専攻の者はどうかというと、文法などには比較的神経質だが、新しい語学教授法というものを軽んじる傾向があるようである。まことにうまくいかないものである。それに、日本語の教師には不向きだからといって、簡単に廃業できるものでもない。では、どうしたらよいだろうか。

そこで一つ提案がある。外国文学・語学出身の日本語教師には、日本学特に日本語学を、日本学出身の日本語教師には外国語特に会話を講習する機関を設けてはどうだろうか。全国でいや全世界で日本語教師をしている者のために、そういう Intensive course をぜひ実現していただきたいと思うのである。